

『文化を転位させる

アイデンティティ・伝統・第三世界フェミニズム』 ウマ・ナーラーヤン 法政大学出版局 2010年 金子 珠理 Juri Kaneko

本書は、インド出身の在米女性哲学者、ウマ・ナーラーヤン (Uma Narayan) の著書 *Dislocating Cultures: Identities, Traditions, and Third World Feminism*. (New York/London: Routledge, 1997) の全訳である。ナーラーヤンが「第三世界フェミニスト」の立場から、西洋人フェミニストの「コロニアリスト・スタンス (植民地主義者の姿勢)」の問題性を暴くその手法はつとに知られているが、初めての邦訳である本書を通して、まとまった形でナーラーヤンの思想に容易に触れられる意義は大きい。フェミニズムの議論において、例えばインドのサティー (寡婦殉死) やダウリー殺人の説明として、「宗教」や「文化」や「伝統」がその歴史性や政治性に無配慮のまま用いられる際の危さは (第2章、第3章)、「宗教」に対してナイーブな傾向のある日本のフェミニズムにとっては他人事ではないだろう。異文化を「尊重する」ことに留まっている従来型の「多文化主義」の問題性が指摘されるところは (第4章)、日本の状況にも通じるものがあるように思える。

以下、章ごとに詳しく追っていきこう。

第1章「文化に異議を申し立てる—「西洋化」、自らの文化への敬意、第三世界フェミニストたち」は、ナーラーヤンの個人的な経験の語りと、分析的・学術的な記述とが融合した興味深い章である。ここでは第三世界フェミニストが自文化の家父長的なものを批判するときに、同胞の原理主義者などから「西洋化」の表れだとして排斥される状況が批判されている。「西洋化」という非難は、植民地期に形成された、「西洋文化」と第三世界固有の「土着の文化」とを対立させる考え方にルーツを持つことが示される。しかし第三世界の文脈で、ある特定の社会の変化 (ジェンダー役割など) が「西洋化」の表れとして非難される一方で、他の変化については無害で「われわれの文化を守るもの」と見なす、「選択的区別」をナーラーヤンは見逃さない。

第2章「第三世界の伝統」に歴史性と政治性を取り戻すために—「コロニアリスト・スタンス」と現代のサティー論」では、ラディカルフェミニスト (そしてフェミニスト神学者)、メアリー・デイリーのサティー論 (『女性/エコロジー』1978年) が批判的に検証される。まずデイリーの論におけるサティーの「歴史性の消去」とサティーが行われる文脈の多様性の欠如を明らかにした上で、デイリーによる「ヒンドゥーの伝統」としてのサティー表象と、現代のヒンドゥー原理主義者らのサティー表象との類縁性に、ナーラーヤンは危惧を表明する。さらに、実際にはイギリス人植民地統治者やナショナリストのインド人による数世紀に及ぶサティー批判の歴史があるが、彼らに対するデイリーの無関心は、「宣教師の立ち位置」の再生産につながるという。続いて、デイリーが用いる「伝統」の概念と、植民地期のサティーに関する近年の歴史研究 (ラター・マニ) が示すより歴史的・政治的な「伝統」の解釈との違いが明らかにされる。最後に現代インドのフェミニストの議論が検討され、サティーをめぐる政治的な問題がデイリーが考えるよりはるかに複雑であることが示される。

本書表紙の帯に記された象徴的な問いかけ「西洋の女性が殴

られると家庭内暴力といわれるのに、第三世界の女性が殴られるとなぜ文化のせいにされるのか」に答えるのが、第3章「クロス・カルチュラルなつながり、越境、そして「文化による死」 インドのダウリー殺人と米国のドメスティック・バイオレンス殺人を考える」である。インドにおけるダウリー殺人 (年間およそ5,000人) の本質

はまさしくDV殺人である。米国のDV殺人件数 (推定年間1,400人) と両国の人口比を考慮すればほぼ同じ発生率なのに、両者を結びつけることは容易ではない。それはなぜか。まずダウリー殺人のような問題が国境を越える際に行われる「脱一文脈化」がもたらす誤解が、文化的に異質な現象についての怪しげな「文化的説明」を助長する。その結果、第三世界の女性は「文化による死」の犠牲者とみなされ続けてしまうのである。一方、米国のDV殺人には「文化的説明」が難しいが (あえて言えば「銃文化」か?)、そこには明らかな政治的含意が看取されるという。

第4章「鏡の向こうの暗闇—使者・鏡・真の当事者という先入観」は、上述のような他者表象の政治性やコロニアリスト・スタンスの問題性を熟知しているはずの研究者にもある陥穽を指摘する。ナーラーヤンはまず、多文化教育の推進において、第三世界出身の研究者・知識人に割り振られる三つの役割 (使者、鏡、真の当事者) について説明する。次に、異文化への「人類学的な見方」 (西洋人は異文化に関心をもつべきであるが、道徳的に批判するのは差し控えるべきである) にもとづいた疑問だらけの「他者の文化」へのアプローチにおいて、使者、鏡、真の当事者という役割を課せられた第三世界フェミニストの困難と当惑が語られる。そして文化的他者への配慮はあるものの実は他者への批判や真の対話がなされていない、これまでの多文化主義のあり方を克服することこそが、本来の多文化主義やフェミニズムの課題であるとし、対話の可能性に希望を託すのである。

第5章「文化を食べる—編入、アイデンティティ、インド料理」は、食、とりわけカレーをめぐる植民地的・脱植民地的アイデンティティの構築を論じたユニークな論考である (本章のみすでに抄訳が存在する)。

総じて言えば、「文化」「伝統」「宗教」についての怪しげな理解の仕方が、国境を越えたフェミニストの政治的協働や多文化主義の考え方に少なからぬ問題を引き起こしていることが、本書を通じて分かるのである。

